

開業奮闘記

継承開業

医療法人社団 晃悠会 ふじみの 救急クリニック

埼玉県入間郡三芳町



理事長 鹿野 晃氏

24時間365日対応の救急クリニックとして、 軽症から重症までを幅広く受け入れる

「世の中のためになることをしたい」という思いで
医師を目指す

Q 開業のきっかけは何でしょうか。

鹿野 「世の中のためになることをしたい」という思いはありましたが、具体的に将来の道は決まっていなかった。若い頃にバックパッカーとしてアジアを放浪したときに、多くの方との出会いがありました。仏教の聖地であるインドの僧侶に、進む道を相談したこともありました。その経験のなかで、「医師になれば、まず病気を治し、そして人を治し、最終的には社会・国の問題を治すことができるのではないか。具体的な道が分からないのなら、まずは医師になろう」と決意し、帰国後医学部を受験しました。

その当時のアジア諸国はまだ発展途上で、雨季で川が氾濫して多くの死者が出たり、お金がないため医者にかかれず亡くなっていく方も目にしました。死を身近に感じる経験があったので、幅広く診ることができる救急医を目指しました。

長く救命センターに勤務するなかで、異変があったとき、すぐに病院にかかるという意識が薄い患者さんもいるように思いました。受診が遅れて命が救えなかったり後遺症が残ってしまうなどの救急医療の現状を目の当たりにし、勤務医としてや



常勤医師3名、非常勤医師16名を含めた約50名のスタッフで地域の救急医療を支える。

れることの限界を感じることも増え、まずは一般社団法人を立ち上げ、地域住民へ救命講習や災害時に備えた防災講習などを開催しました。

それでもやれることには限界があって悩んでいた時に、偶然知り合いから「救急クリニック」という新しい形態の開業スタイルを聞き衝撃を受け、自分でもやってみようと思ったのが開業のきっかけです。

遠方にある病院へ時間をかけて運ぶ前に、近くの救急クリニックでまず心肺蘇生処置をして、そのあと検査をしたり病院で治療すれば、救命率も上がり、後遺症に苦しむような人が減るのではないか、それが世の中のためになるのではないかと考えました。

また、救命センターでは、初療を行ったあと各診療科へお願いすることが多いので、患者さんがどのように治って、退院して、地域で暮らしているかというところまでは携われません。すべてを含めて地域の方々の命を守っていきたくらい、開業を決意しました。

Q 開業までは順調でしたか。

鹿野 開業するにあたって、まずは実際の救急クリニックへご挨拶に行き、情報をお聞きしたり、アドバイスをいただきました。

救急クリニックの一番の課題は、検査機器を充実させる必要があるため、初期費用がかなりの金額になることです。この課題を一気に解決できたのが、継承開業でした。脳外科を標榜している継承元の遠山脳神経外科では、CT1台、MRI2台を備えてあり、初期費用を抑えることができ理想的な継承開業となりました。

また、この地域は年間で約1万人の救急患者さんがいますが、そのうちの3分の1は地域外に搬送されていました。その現状も事前に消防署へご挨拶に行ったときに耳にし、この地域で救急クリニックを開業することは、地域の方々のためになることだと思いました。

継承元の遠山先生とも良い関係が築け、現在も当院の脳神経外科部長として診療を続けても

らっています。脳外科の患者さんやスタッフもそのままです。開業時にある程度のベースは確保できました。

クリニックの経営のこと、届出関係、税理士の仲介などはコンサル会社の総合メディカルに助けをもらい、手間が少なく開業までスムーズでした。



CT1台、MRI2台を備え、近隣の医療機関からの検査依頼も受け入れている。

自前の民間救急隊を発足
地域の救急患者の
受け入れ体制を整える

Q クリニックの特色を教えてください。

鹿野 当院は、24時間365日、かぜやケガなどの

軽症から重症まで、何でも診られる救急クリニックを目指しています。「町の保健室」のような、何か困ったことや症状があったとき、診療科を限定せずにかかれるようなクリニックでありたいです。

地域との役割分担も大事だと考えています。二次救急や三次救急を担う病院に軽症の患者さんが増えてしまうと、本来の機能が発揮できなくなってしまいます。軽症から中等症の患者さんは当院で受け入れ、手術も含めて当院では対応できない患者さんを二次・三次救急病院で受け入れていただければ、当地域の救急患者さんは地域で完結できます。さらに、比較的軽症で、地域に帰れる状態になった患者さんについては、普段のかかりつけ医で診ていただくという、地域連携の流れはしっかりとやっていきたいです。

また、日ごろ検診を受けていない方や何か症状があったときにしか医療機関にかからない方も多くいらっしゃると思いますので、受診されたときにはなるべく幅広い範囲で、何らかの病気や生活習慣病などが隠れていないかを拾い上げて通院治療に結びつけ、大きな病気になる前に未病の状態治療する「予防」も意識しています。

Q EMT科(救急救命士チーム)について聞かせてください。

鹿野 当院は2019年5月にEMT科を設置し、自前の救急隊を発足しました。発足のきっかけは、地元救急隊に迷惑をかけないように転院搬送は自前でやりたいと思ったことでした。そのために人員をそろえるのであれば、要請があった個人宅や老人ホームへお迎えにあがり、診療を行い、必要



同院が所有する民間救急車は消防の救急車と同等の車両を使用し、月間で100件程度出動している。

であれば転院搬送まで自分たちで行うといった一連の流れができたらいいなと思いました。自分の経験や能力を生かし、運営は十分可能であると判断しました。専門的な講習を受け、MC(メディカルコントロール)の資格を有していますので、安全性の確保にも最善を尽くしています。救急救命士、看護師、場合により医師が同乗して現場に向かい、クリニックと車内をテレビ電話でつなげて病状を確認できますので、早期の検査や治療が行えます。

救急要請は増えていますが、行政で救急隊を増やすことは国の財源の関係でも難しいと思います。救急車の適正利用が叫ばれる世の中ですが、どういった場合に救急車を呼べばいいのか、患者さん自身も分からないのが現状です。そこでも、重症の方は行政の救急隊で対応し、軽症・中等症は当院のような民間救急隊が担当するといった役割分担ができるのではないかと考えています。

また、救急救命士はおおよそ半分くらいが消防に入って救急隊になりますが、残りの半分は救急救命士の資格を生かした仕事できていません。そういった埋もれた人材を、当院のような民間救急隊で活用したいと考えました。



遠方の病院へ搬送する前に同院で救急処置を行い、救命率向上や後遺症の減少に寄与している。



EMT科(救急救命士チーム)では、転院搬送のほかにも自宅や老人ホームからの要請にも対応する。

増築によりハード面を強化 地域ニーズに合わせた医療の提供を目指す

Q 今後の取り組みを教えてください。

鹿野 継承開業から一年近くが経ちますが、ありがたいことに想定より多くの患者さん来院していただいています。19年10月からは常勤医師がさらに1名加わり、4診体制になります。そのため、待合室や診察室などのハード面に限界を感じ、増築することが決定しました。

増築したら、まずは開業の思いでもある、この地域で受け入れることができずに遠方の病院へ搬送されてしまう患者さんを減らすため、地域の救急要請や救急患者さんの数やニーズに応えられるだけの体制を整えたいです。そのために近日中に病床19床を獲得すべく、県に申請中です。病床では、救急患者さんはもちろんのこと、在宅などで看取ることが難しい患者さんを受け入れるなど、地域のニーズに合った利用を考えています。

ほかには、脳外科も標榜している強みを生かして、脳梗塞などに対する血管内治療といった専門的な処置もできるような「救急処置室」を整備する予定です。

さらに、退院後に住み慣れた地域で健康に過ごしてもらえよう、リハビリや訪問診療にも取り組んでいきたいと思っています。自分自身、勤務医時代に在宅医療に従事した経験があります。状態



「地域の救急医療を充実させるため、クリニックの増築により受け入れ体制を整えたい」と語る鹿野理事長。

が悪いときは当院で入院も可能になりますし、症状が落ち着いたら地域に帰れるような仕組みを作っていきたいです。

また、当院のように民間救急隊併設の救急クリニックが地域のニーズを満たし、有益であるならば、日本各地の困っている地域に分院展開できたらいいですね。その一歩として、当院がモデルとなるよう運営していきたいです。

勤務医時代にはできなかった、救急から在宅まで、地域の方々の住み慣れた場所での暮らしを支えていけるような医療を、今後も提供していきたいです。



2020年増築リニューアルオープン予定。

開業までの軌跡

2002年	藤田医科大学 医学部卒業
2004年	相澤病院 救急科
2009年	青梅市立総合病院 救命救急センター 医長
2018年5月	遠山脳神経外科 副院長
2018年11月	ふじみの救急クリニック開業

clinic data



医療法人社団 晃悠会 ふじみの救急クリニック

〒354-0044
 埼玉県入間郡三芳町北永井997-5
 TEL:049-274-7666
<https://koyu-kai.jp/>
 ■診療科目:救急科、脳神経外科
 ■病床数:なし